

自己評価結果公表シート（平成30年度）

東大阪大学附属幼稚園

1.本園の教育目標

<ul style="list-style-type: none">・豊かな感性を育てる・知的能動性を育てる・子どもの表現を育てる・社会性を育てる・体力をつけ、持久力、集中力を育てる

2.本年度、重点的に取り組む目標・計画

<p>従来から取り組んできた配慮児研修（発達障害、発達遅滞を含む）を計画的に取り組むと同時にすべての園児にとって個々の能力が向上するよう、小集団を活用した実践をする。</p> <p>又、未就園児（2歳児）の子育て支援に積極的に取り組む。</p>
--

3.評価項目の達成及び取組状況

評価項目	取組状況
保育の計画性	<p>本園の目標管理システムに沿っての年間計画を立案し、年度当初に教職員全体で確認している。</p> <p>年長・年中・年少・未就園児体験保育（2歳児）、それぞれ年間計画、年間目標をもとに年間の取り組みの具体的目標達成に向けての援助、配慮等を相互研修しながら保育を実施した。</p>
健康と安全への配慮	<p>身体測定、歯科検診、内科検診を実施するとともに熱中症・感染症への対策、食の安全への配慮をしながら健康の維持、増進に努めている。</p> <p>又、学園警備員による巡回、防犯カメラによる安全確保も努力している。</p> <p>自然災害に対しては耐震に対応出来る園舎と非常食・飲料水の備蓄、災害用簡易トイレ・災害非常用アルミシート・防災頭巾の常備とともに津波発生の際における避難場所として、本大学校舎3階の確保もしている。（880万人の一斉防災訓練を実施している。）</p> <p>警察官による交通安全教室、消防署員による防災訓練、大学・高校・幼稚園合同の地震津波発生を想定した避難訓練も実施している。</p>
情報の発信	<p>園だより・クラスだよりを月1回作成し、急を要する連絡は一斉メールを発信して保護者に伝えている。</p> <p>年間行事やイベント、園外活動や日頃の保育内容も本園ホームページ内のブログで子ども達の様子を週2回位の割合で発信している。</p> <p>参観・懇談会・親子行事等を通じて生の保育を。行事を通して保護者との情報の共有を深めている。</p>
研修への参加	<p>大私幼の研修とともに、本学園の大学教授による職員研修を実施している。また、年間5回にわたり配慮児研修を実施し、研修と実践の検証をしている。</p>

子育て支援	<ul style="list-style-type: none"> ・園庭開放を月1回実施し、未就園児・在園児・卒園児・地域の子どものコミュニケーションを図る場としている。 ・年間5回程度、発語・発声等の不安を感じている保護者の相談にのっている。 ・平成28年度から、土曜預かり保育（11h）を実施している。 ・本大学に併設している子ども研究センターの子育て支援とともに、未就園児の教育相談にも相談員二人で対応している。 ・未就園児体験保育（2歳児）の母子分離を6月に実施し、週2回コースを設置。又、3学期より2h～4h体験のコースも設置している。
-------	--

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

<p>子どもへの具体的な取り組み（保育・行事）は十分に実践できていたと思われる。</p> <p>当初の目標に沿った子ども理解、保護者理解を基本にした実践は子どもの発達を十分達成できたと思われる。情報・発信等についても、保育の内容や幼稚園の教育方針がよくわかるように工夫していたように思う。今後もより充実した発信へとつなげていきたいと思う。</p> <p>子育て支援についても当初の計画通り実施できたが、次年度は未就園児（2歳児）への子育て支援をより充実していく方向で考えていきたい。具体的には、3学期から開始した4時間体験コースの開始時期を早めることも視野に入れた取り組みを実施していきたい。</p> <p>待機児童の増加に対応するため、土曜預かり保育（11h）を実施し、「働いていても幼稚園」という目標に向けて努力している。</p>

5. 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取り組み方法
子育て支援の充実	未就園児（2歳児）への子育て支援の幅を広げ、選択肢を多くすることにより、個々の課題を解決できるような内容を作りあげていきたい。
自然と環境教育を通じて命を大切にする教育の充実	防災教育とともに、食教育・環境教育に力を入れていきたい。 本園のキッズファームでの作物づくり（イチゴ・じゃがいも・さつまいも・大根）を通して、季節ごとキッズファームにて園児を活動させ、自然体験学習を行っているが、さらに発展させ命を大切にする教育へとつなげていきたい。
国際理解教育の推進	東南アジア・東欧等の保護者の方が近年多くなったことから、多文化共生の保護者理解・子ども理解の視点に立った研修が必要となってきた。次年度から計画的に取り組むたい。 年長児は年間5回、「英語で遊ぼう」の設定保育内で外国人講師によるネイティブの指導を開始した。

6. 学校関係者の評価

<p>保護者代表者、学園評議員、市内の中学・高校教職員による評価の結果、本園の取り組みは妥当であると認められた。</p> <p>土曜預かり保育、ネイティブ英語の実施などの提言を具体化している。</p> <p>また、幼稚園教育要領の改訂に伴い園内保育研究授業の実践を積極的に実施できている。</p>
--